台大日本語文研究第 8 期
2005 年 6 月，頁 93-124
本文 2005. 4. 25 收稿，2005. 5. 13 通過刊登

# 飄浪女的「戀愛幻想」—林芙美子《浮雲》—

黃 錦容 *

## 摘 要

《浮雲》（1950 年）是流浪小說家知名的林芙美子晚年的傑作。在完成《浮雲》不到三個月後，芙美子便與世長辭。第二次世界大戰時，女主角ゆき子（Yukiko）爲了逃離與姊夫弟弟伊庭的不倫之戀，而前往法屬印度尼西亞——在越南南部的答拉（Dalat），在當地ゆき子邂逅了已婚的農林省技師富岡，兩人陷入熱戀，不久日本戰敗各自返回日本。ゆき子無法忘記在法屬印度尼西亞時那夢幻般的戀情，苦纏著一直無法離開妻子的富岡。明知道這男子的頹廢不堪，卻藕斷絲連地持續這段孽緣的男女情痴物語。

ゆき子對戀愛的幻想，表面上看來依賴著男性，然後與許多男性發生性關係，是既屈辱而墮落的。然而，在實際生活上，她像娼婦般的性經驗，則展現出一種既奔放而自由的生活方式。但在家庭體制之外的異類女性，對於戀愛、對於感情，有怎樣的深刻體會呢？ゆき子到病死爲止，一生都被貼上情婦、娼婦的標籤，像她這樣家庭體制外的女性，在其輾轉身處日本與殖民地間所經歷的戀情，她內在所潛藏的「他者性」——不自覺地遊移在「自立」與「依賴」之間的心態習慣，乃至於她心裡揮之不去、戀愛型態裏成雙成對的舊鄉愁，其內涵正是本論文所欲剖析的主題。

關鍵詞：《浮雲》、富岡、ゆき子、戀愛幻想、他者性

* 政治大學日本語文學系教授。

臺灣大學學術期刊資料庫

# The Love Fantasies of A Wandering Woman
## —On “The Drifting Cloud” by Hayasi Fumiko—

Huang, Ching-jung *

## Abstract

“The Drifting Cloud” (1950) was one of the great works by Hayasi Fumiko, a famous vagrant novelist, in her latter part of life. Hayasi Fumiko passed away within 3 months on completing “The Drifting Cloud.” In World War II, the female protagonist, Yukiko, headed for the French Indonesia--- Dalat of Southern Vietnam, to escape from the unethical love with her brother-in-law. There, Yukiko met and fell in deep love with the married agricultural technician, Tomioka. Shortly after the Japanese lost the battle, and they each returned home to Japan. Yukiko could not let go of the dream-like affair in the French Indonesia, and kept contacting with Tomioka, who was not able to leave his wife. Knowing that the man is extremely decadent, she still continued with this unblessed affair, and could not let go of it.

Superficially, Yukiko’s love fantasies that had caused her to depend on males and to have sexual relationships with various men, were humiliating and degenerative. Yet in the real life, the prostitute-like sexual experiences were displaying a kind of ebullient, free lifestyle. All her life until she died of illness, Yukiko had been labelled as a mistress, a prostitute. This essay will seek to dissect and analyze the following themes: the affairs that a woman outside of the family system experienced in and out of Japan and the colony; the hidden, internal “otherness”—attitude and habitual behaviours that unknowingly drifted

* Professor of Department of Japanese, National Chengchi University

臺灣大學學術期刊資料庫

between “independence” and “reliance”; and the old, unforgettable nostalgic lifestyle of a couple deeply in her heart..

Key words: “The Drifting Cloud”, Tomioka, Yukiko, Love Fantasies, otherness

臺灣大學學術期刊資料庫

# 放浪する女の恋愛幻想—林芙美子『浮雲』—

黃　錦容 *

## 要　旨

『浮雲』（1950 年）は放浪の小説家で知られている林芙美子の晩年の傑作である。『浮雲』の完成後、三か月足らずして芙美子はこの世を去った。第二次大戦下、主人公ゆき子は、義弟との不倫を逃れて仏領インドシナに渡った。ベトナム南部の高原都市ダラットでゆき子は既婚の農林省技師の富岡に会い、愛し合ったがやがて敗戦となりそれぞれが日本に帰ってきた。女は仏印の夢が忘れられず、妻と別れきれないでいる男の後を追いまわす。ダメ男と分かっていても、別れようにも別れられない、腐れ縁でズルズルと関係を続けていった男女の情痴の物語である。

ゆき子の恋愛幻想は表面的に男に依存して、何人かの男との性的交渉を通して、屈辱的に堕落していくように見受けられるが、実は生活の面で、その性的体験はかなり娼婦らしい奔放的で自由な生き方をしている。だが、家庭外の異類の女はどんな恋愛感情を噛み締めていくものであろうか。本論文は病死するまで生涯情婦と娼婦のレッテルを刻印されたゆき子の家庭外の女の、転々と居場所の日本と植民地を経験した彼女の恋愛感情に潜んでいる他者性——無自覚に自立と依存を入れ替わる心的習慣、ないしその拭いがたい郷愁となる対幻想——の内実を解明したいものである。

キーワード：『浮雲』、富岡、ゆき子、恋愛幻想、他者性

* 政治大學日本語文學系教授

臺灣大學學術期刊資料庫

# 放浪する女の恋愛幻想—林芙美子『浮雲』—

黄 錦容

## 一、放浪女の越境——共存と背反の両義性

『浮雲』[1]は放浪の小説家で知られている林芙美子の晩年の傑作である。『浮雲』完成後、三か月足らずして芙美子はこの世を去った。芙美子は、残り少ない自らの命をけずり、渾身の力をこめて『浮雲』を書いたのである。第二次大戦下、主人公ゆき子は、義弟伊庭との不倫を逃れて仏領インドシナに渡った。ベトナム南部の高原都市ダラットでゆき子は既婚の農林省技師の富岡に会い、愛し合ったが、やがて敗戦となりそれぞれが日本に帰ってきた。女は仏印のロマンスが忘れられず、妻と別れきれないでいる男の後を追いまわす。ダメ男と分かっていても、別れようにも別れられない、腐れ縁でズルズルと関係を続けていった。富岡と縁が切れず、途方にくれたゆき子は或る外国人の囲い者になったし、妊娠したゆき子は中絶し、再び伊庭の囲い者となった。屋久島の新任地へ行く富岡にゆき子はついて行き、富岡が山に入っている留守の間にゆき子が呆気なく血を吐いて死んだ。まず芙美子自身の自作解説からこの作品の創作意図について踏まえておきたい。

> 〈この作品は、或る時代の私の現象でもあるのだ。よいものか、悪いものかは、読者がきめてくれるものであらうが、私は、この「浮雲」のあと、非常に疲れた。めまぐるしく私の周囲の速度は早い。こんな地味な仕事をこつこつやってゐるうちに、歴史はぐるぐる変化してゆく。だが、私は、この作品は、私にとって、最も困難な仕事でもあった。四囲のこともかまわずに、この仕事にむきあってゐた。**いはゆる、誰の眼にも見逃されてゐる、空間を流れてゐる、人間の運命を書きたかったのだ。筋**

[1] 昭 24.11～昭 25.8 雑誌「風説」に、引続き昭 25.9～昭 26.4 雑誌「文学界」に連載され、完結し、昭 26.4（1951）六興出版社から出版された。

臺灣大學學術期刊資料庫

**のない世界。説明の出来ない、小説の外側の小説。誰の影響もうけてゐない、私の考へた一つのモラル。さうしたものを意図してゐた。**（略）**神は近くにありながら、その神を手さぐりでいる、私自身の生きのもどかしさを、この作品に描きたかったのだ。**（略）**一切の幻滅の底に行きついてしまって、そこから、再び萌え出るもの、それが、この作品の題目であり、「浮雲」といふ題が生まれた。**……〉（林芙美子『浮雲』あとがき、1951.3.3 下落合にて）

ゆき子の造型にはあくまでも家庭外の女として設定され、悪女というよりもむしろ無判断で腐れ縁に身を流されていくだらしのない女として造形される。従来の研究視点には、主に主人公ゆき子の形象性に集中され、〈富岡の気持ひとつによって幸不幸がゆれている他動的な女性〉[2]として把握されている。〈女は経済力をもたないので、男性に依存して生きなければならない。そこで、相手の男しだいで女の幸不幸が定まる〉[3]、いわゆる〈惚れやすい女〉[4]である。これまでの諸研究には作家の生涯の生き方まで言及され、ゆき子の形象性には芙美子自身の普遍的な人生感情が付与されるところが大きい、という言説はほぼ定着している。作家芙美子の獲得した人生観――〈男に苦労をしつくした女〉、すぐ惚れてしまう女には、男性は見えないということは、平林たい子氏は〈信念とか思想性のない「情とみれんが深く情熱的で淫蕩で多少破廉恥な」林文学の女の「典型の集大成」〉として厳しい指摘をしている。このような芙美子批判に対して、渡辺澄子氏は、〈実行する女を歓迎し賞賛するようにはこの国の土壌は耕されていない。どちらかというと保守的なゆき子のような女を男は愛し、多くの女たちも面白く思う。芙美子は制度に囲繞されて振り回されながら、男に依拠して生きるしかない庶民の女を

2 熊坂敦子「浮雲〈林芙美子〉」、「国文学」巻号：13-5、1968.4、P5～
3 板垣直子「近代女流作家の肖像　林芙美子―作風の向上と発展」、「解釈と鑑賞」1972.3
4 渡邊澄子「林芙美子と平林たい子」「国文学解釈と鑑賞　特集林芙美子の世界」63 号―2 至文堂、1998.2

臺灣大學學術期刊資料庫

描いた〉[5]と、むしろ日本の土壌に根付いた庶民の女の生き方として把握してみた。

このように、先行研究において、自立と依存の両義性、中途半端な目覚め方をしているゆき子の無自覚の他者性がしばしば指摘されるものである。果たしてゆき子のこうした旧い心的習慣、こうした拭きがたい対幻想はそのまま〈時代を超えるもの〉[6]として考えられるのだろうか。そして、水田宗子氏の説には、現代フェミニズムの観点から、ゆき子の堕落と愛欲生活をむしろ「破滅と新生」の両義的なものとして見た。日本内部の家庭という従来の女のカテゴリーをはみ出した放浪女の自立問題、男性という他者との係わり合いの経験を通して、そこには常に〈「厄病神」という異邦人の私に出会うことからくる、自己蘇生〉の〈近代の女性たちの内的な旅〉であった。さらに、場所の経験という視点から見て、福田珠己氏が〈長篇『浮雲』においても、人間の一生を太空に流れ、また消えていく浮雲のようにはかなく虚無的なものとして描いている。林芙美子の作品の中には常にinsidenessとoutsidenessが共存しているということができる。〉[7]と、ゆき子には〈insidenessとoutsidenessの同時共存〉、背反が生成し、反復されていったと指摘している。

しかし、家庭外の異類の女の恋愛像には、場所における内部（内地、家庭というカテゴリーで限定され、保護される女の居場所）と、外部（海外、放浪という形で自由女の生き方）の共存と背反だけで捉えられるものではない。ゆき子の恋愛幻想は表面的に男に依存して、何人かの男との性的交渉を通して、屈辱的に堕落していくように見受けられるが、その性的体験はかなり娼婦らしい奔放的で自由な生き方をしている。だが、その内面の恋愛感情においては実はか

---

5　渡邊澄子「林芙美子と平林たい子」「国文学解釈と鑑賞　特集林芙美子の世界 63 号-2 至文堂、1998.2

6　今川英子「林芙美子『浮雲』試論」昭和学院短期大学「昭和大学院短期大学紀要」29 巻、1993.3

7　福田珠己「場所の経験：林芙美子『放浪記』を中心として」、「人文地理 43-4」人文地理学会、1991.8

臺灣大學學術期刊資料庫

なり他動的に愛に渇いている女性として造形される。文学のテクストの「空間」で開示された主人公の生の「空間」がロトマンの現象学の空間論によれば、組織され、構造を持つ〈内部〉と、未組織で構造をもたない〈外部〉という対立項が考えられ、文化と野蛮、インテリと民衆、コスモスとカオス、というように様々な文化テクストにおいて可変体として読み替えられるという。ロトマンは「境界は、内部空間か外部空間のどちらかのみに属し、一度に両方に所属することはない」[8]といい、意味論的場としての境界を一義的に決定する。その代わり、前田愛氏は山口昌男氏の多義的な境界の特性[9]から考えて、〈文学テクストに描き出された登場人物の越境もまた彼の行為の中に隠されている両義性を開示し、もうひとつの生の可能性を垣間見させる契機である〉[10]と、更に厳密に定義づけようとする。生涯情婦と娼婦のレッテルを刻印されていながら、転々と居場所の日本と植民地を経験したゆき子であるが、そうした外部（異郷と家庭外の女という二つの空間）体験を通して、果たして彼女は生の豊かさを取り戻していったのだろうか。ゆき子の噛み締めていく恋愛感情の内面に潜んでいる他者性――無自覚に自立と依存を入れ替わる心的習慣、最後には日本の内部空間へ回帰した彼女の拭いがたい郷愁となる対幻想の内実はどういう有様のものだろうか。本論文は上述の説に「運命」、「男の体臭」、「はかない習慣」としか解釈されていないゆき子の評価問題を更に厳密に定義し、まず放浪女の越境という行為を通して、その生まれ変わる新生の契機が開かれたか、という視点から問題提起としたい。そして、第二の視点として、ゆき子の恋愛幻想から敷衍させ、芙美子の晩年における「他者化した戦後空間」について、結びとして触れてみたいものである。

---

8　ロトマン『芸術テクストの構造』、1970。ユーリー M.ロトマン著；磯谷孝訳『文学理論と構造主義―テキストへの記号論的アプローチ』、勁草書房、1998.6

9　山口昌男『文化と両義性』、岩波書店、1975.1岩波現代文庫、2000.5

10　前田愛「空間のテクスト　テクストの空間」『都市空間のなかの文学』、ちくま学芸文庫、1992.8　　初出：同題、「現代思想」1982.7

臺灣大學學術期刊資料庫

## 二、性差で示される放浪女の身体表現

『浮雲』の舞台は、戦後まもない戦争で荒廃した東京である。それに、伊香保と屋久島が加わる。主人公、幸田ゆき子と富岡謙吾の思い出の場としても重要である。昭和十八年の秋、戦争中、農林省のタイピストとして二十二歳の幸田ゆき子は、仏印（現、ベトナム）の高原地帯ダラットに派遣され、そこで富岡と知合い、二人は結ばれた。ゆき子は、東京でタイピストの学校に通っていた時、寄宿先の主人伊庭――ゆき子の姉婿の弟に犯され、それから三年間、伊庭の妻の眼を盗んで関係を続けていた。そんないまわしい生活に嫌気がさし、また戦時下の日本の息詰まるような重苦しい空気に耐えかねて、自ら志願して仏印に渡ったのである。ゆき子の外観から見ては、どうしても〈地味で、一向に目立たない人柄〉で、〈軍の証明書に張ってある彼女の写真は、年よりは老けて、二十二歳とは見えなかった〉（三）[11]。海外での仕事は情婦の性的役割しか果たして来なかったことへの反動として脱出したように見えても、彼女の愛と性は果たしてそれほど純粋な感情のものであろうか。ここであらためて、ゆき子の愛と性について考えてみたい。まず最初の相手伊庭杉夫はゆき子が寄宿して一週間めに彼女を犯し、その後三年間関係を続けるが、ゆき子には「恋愛の情」よりも、むしろ不倫であるがゆえの苦しさ、憎しみがあった。まずテキストの中において最初からその情欲表現がむしろ忌まわしいものであった。〈目立たない自分のような女に、どうして杉夫がこんな激しい情愛を見せてくれるのか、ゆき子は不思議だった〉。〈将来に就いて語りあうというでもなく、まるで娼婦をあつかうようなしぐさで、杉夫は、ゆき子をあつかった〉（三）。家庭外の女（娼婦）になぜあれだけの激しい情愛を見せてくれたのか、ゆき子が不審に思った。不倫関係の中で男という他者が理解できずに、他動的な扱われ方をしながらも薄々自分の娼婦性に気づいたものであった。森英一氏の見解によると、日本

[11] 作品の原文引用は新潮社『林芙美子浮雲』（昭和 28.4.発行、昭和 43.6 改版、平成 12.57 刷）によるもので、現代仮名遣いに改められたものである。

臺灣大學學術期刊資料庫

から脱出する以前から既にゆき子の内面に備えている〈理性が本能の前には一かたまりもないない〉娼婦性、魔性が早くから覗いていると言う。

ゆき子と冨岡の出会った場所はダラットという異郷であるが、両者の海外への脱出願望は違った内実を抱えていたのである。ここでゆき子は農林省から派遣されていた技官の富岡と知り合ったのである。富岡は、東京に妻がおり、また現地の女中ニウとも関係していた。ダラットは、戦時下というのに美しい風物に包まれたのどかな町で、ゆき子にとってはまさに天国であった。海外へ飛び出してきたところで、依然として空虚を感じて、ゆき子の不安と孤独感はひたすらただニヒリズムの響き方がしていた。ゆき子の本当の願望はただ〈戦争の中で、若い女が、毎日、一億玉砕の精神で、どうして暮らしてゆけて？私、気まぐれで、こんな遠いところへ、来たんじゃないのよ……。何処かへ、流れて行きたかったの。何処かへ、流れて行きたかった〉（九）。ダラットには富岡の同僚の加野がおり、加野はゆき子に魅せられたが、富岡とゆき子の愛の進展を知って、刃傷事件まで起こした。ゆき子を眺めて、加野が興味を感じるのは自分と同様に「流されて来た」孤独感を味わわされている匂いがしていた。

戦時中の不安、孤独、幸福感などは三人三様であるが、そこには一脈共通したニヒリズムが流れていた。気まぐれで投げやりの気分であった。しかし、未だこの時点において、ゆき子が魅せられている富岡の存在と内心が読めるほどのものではなかった。富岡の不安と空虚的心情は実際はゆき子と加野二人以上に自己理解し、さらに激しい自責の念に駆られていたのである。こうした富岡の他者理解はむしろ絶えず厳しい自己批判を加えた上で、常に他者という鏡に映り出されている自分の姿へ冷ややかな視線で捉えられていたのである。戦争中の富岡の「幸福」感覚とはどういうものであろうか。それは〈我々は幸福と云うものだ。軍の目的はとにかくとして、我々は自分の職分にしたがって森林を護ってやればいいンですよ。充分

臺灣大學學術期刊資料庫

にめぐまれた仕事として、それだけは感謝しているからね〉（七）という戦争と内地からはみ出された者 outsideness の自己認識と喪失感を抱えていた。ゆき子の目から見れば富岡の人柄は〈風変りな人間〉で、〈仲々情の深い男。（略）三日に一度、細君に手紙を書いているということが、何故だか、ゆき子にはがんと胸にこたえた〉（七）。

富岡の場合はゆき子に対して、最初の感情はただの〈「取り澄ましてる女じゃないか？」富岡が吐き捨てるように云った〉。〈若い女がこんな処まで来るのは厭〉（八）だった。いよいよ寂しさを紛らすためにゆき子に好感を持ち始めてからも、〈幸田ゆき子のすくすくした躯つきが、妻の邦子に何処か似て〉いて、〈同じ人種の男女にだけ、通じあう、言葉や、生活の、馴れ馴れしさが、ここに一人現れて、幸田ゆき子によって示された〉（十）と言う、妙な発見が、富岡の心に響いた。二人が結ばれてからも、冨岡は一向に冷酷な仕打ちしか示さなかった。その代わり、ゆき子の満足の仕方は不釣合いの過大のものであった。〈**ゆき子は、時々微笑が湧いた。深いちぎりとまではゆかないけれども、一人の男の心を得た自信で、豊かな気持ちであった**。（略）冷酷をよそおっていて、すこしも冷酷でなかった男の崩れかたが、気味がよかったし、**皮肉で、毒舌家で、細君思いの男を素直に自分のものに出来た事は、ゆき子にとっては無上の嬉しさである**。富岡の冷酷ぶりに打ち克った気がした。〉（十二）

一体、富岡は日本社会からはみ出された者の投げやりの気分以外に、日本の内部へ向かわざるを得ない志向性を示しているのがその心的状態の大きな特徴となる。終戦により、日本に戻ったゆき子は、先に帰国していた富岡を訪ねた。富岡は帰国に際し、「君が帰るまでには、きちんと解決して、奥さんとも別れてしまって、さっぱりして、君を迎える」と約束したのであったが、ゆき子を迎えた彼は、すでにダラットでの彼ではなかった。彼には、彼の帰国を首を長くして待っていた老父母と妻があり、その家族との生活を崩す気はなく、もはや彼の心はゆき子のものではなかった。彼は農林省を辞め材木関係の仕事を始めていたが、それもうまくいかず、生活も不如

臺灣大學學術期刊資料庫

意であった。内地に戻ってきてからは冨岡の孤独の中身が変っていくが、再会する場面で富岡の無感動と冷酷さが示されるようになる。〈ゆき子を、遠くから眺めて、**富岡は、何の感動もなかった。舞台がすっかり変わってしまっているこの廃墟では、ダラットでの夢をもう一度くりかえしてみたいという気はしなかった**。苛ら立った心をおさえて、もう終末の来る断定だけで、富岡はゆき子のそばへ歩み寄った〉(十三)。

ゆき子は、疎開していて荷物だけ先に来ていた伊庭の家から、布団など持ち出し、池袋に部屋を借りて一人の生活を始めた。ゆき子はそんな富岡でも、富岡が忘れられず、二人の関係はずるずると続く。しかし、富岡は〈何の感動もなく、昼間から敷き放しの蒲団に二人は寄りそって、こおろぎの交尾のような、はかない習慣に落ちしまうのである〉。富岡の愛欲感情の内実はただ自分の空虚な果かなさを忘れるための行為だった。ここにおいて富岡の視線の意味はまだ朦朧でありながら、既にゆき子の存在をわが〈残酷なほどの痛ましい心の苦闘を、もう一人の分身として、そこに放り出されている現実の己れに富岡は委ねてみる〉(十四)として無感動のままお互いのどうにもならない生の果かなさに薄々感じ取っているのである。それでは内地で再会した時点において、ゆき子の恋愛感情はどう変わってしまうのだろうか。内地に戻ってからは激しい情熱が跡形もなく消え失せ、男との性的行為も惨めなものであった。昔の伊庭の情婦をしていた頃と似たような扱われ方をしている自分にゆき子が気付いてしまうものであった。〈ゆき子は富岡の躯にあたためられながらも、もっと、何か激しいものが欲しく、心は苛だっていた。こんな行為は男の一時しのぎのような気もした。伊庭との秘密な三年間にも、こんな気持ちがあったのを、ゆき子は思い出している。もっと力いっぱいのものが欲しいといったもどかしさで、ゆき子は富岡から力いっぱいのものを探し出したい気で焦っていた〉(十四)。彼女は二の舞を踏むまいと焦り始めた。そうせしめたのは富岡の仕業というよりも、伊庭にある制度的な家庭外の女への扱い方のそれと

臺灣大學學術期刊資料庫

違って、語り手の解釈ではそれはむしろ「貧弱な環境のせい」で、「敗戦の底に沈んで」(十四)しまった両者の敗戦後の喪失感という同質性を見出すものであった。しかし、このような語り手の裁断は果たして当を得ているものだろうか。富岡の方は既に罪意識の心的作用が大きく働き出したものである。〈現在の生活の淋しさを、ゆき子によって遁れようと、秘密な誘惑に頼ろうとしている自分の身勝手さが、背筋に冷たい汗のように走った〉。(十六)。

両者の感情の変化が既に始末の悪い薄手な感情で色褪せつつあるのが二人の共通感情であった。ゆき子自身もそれに気つかずにいないわけはなかった。〈無理な工面をして逢う、そして、二人だけの共通のなかにある遠い思い出をたぐり寄せて、色も香りも失せつつあるその思い出に酔っぱらってみたくなっている感情の始末の悪さ……。只、それだけのことなのに、一度、二度、三度とゆき子は富岡に逢いたがっている。そうして逢えば、その思い出も、色があせつつあるのを知らされるだけのものだった。この敗戦の現実からは、二人の心のなかにある、遠い思い出なぞは、少しも火の気を呼ばないのだった。愛しあったら、その場ですぐ一緒にならなければ、永遠に悔いを残すのだと、ダラットにいたときに、富岡が云ったことがある〉(十九)。ここでゆき子が確認し得るものは場所に限定される一時的な激情のものだという恋愛認識である。

そんなある日、ゆき子は、町で声を掛けられたアメリカ兵を自分の部屋に泊めた。アメリカ兵はゆき子の部屋をしばしば訪れた。ある日、富岡はゆき子の家で、アメリカ兵と鉢合わせしたが、そんなゆき子を見ても、富岡は怒る気魄もなく、かえって女の逞しさをみるのであった。ゆき子の表面的な堕落振りは実はより身体的表現の肉体感覚、或いは生活感覚のものであった。この時からゆき子の内面に秘めていた自由奔放な原始的な生の力を逞しく表現するようになる。この段階では当時ダラットで富岡の心を得た自信のそれと同様〈言葉は充分ではなかったが、お互いの人間らしさは、肉体で了解しあっている気安さで、ゆき子は何事にも恐れのない生活に踏み

臺灣大學學術期刊資料庫

出して行ける自信がついたような気がした〉（二十）。

これほど割り切れるのは二元性を持った家庭外の女の独特で自由な生き方であった。富岡と恋に落ちた昔では富岡の心情変化はただ妻の邦子のどかかに似ていて、海外における、「言葉のニューアンスが通じた同じ人種」のそれとは随分性質の相反する感情である。言ってみれば、ゆき子の娼婦的性格には一種の人間らしさ、肉体的な温もりを求めているようなものである。それと引き換えに、富岡の場合はより同質社会（日本の女及び日本という社会）の内部指向の意味のものであった。だから、ここで示されたゆき子は無自覚的にある意味のアイデンティティを超えた上で、「身体」表現の他者性を見抜いてしまっていると思われる。一切の社会制度による束縛を振り切れるゆき子のに対して、富岡は〈**何ものにも影響されない、独得な女の生き方に、富岡は羨望と嫉妬に似た感情で、ゆき子の変貌した姿をみつめた。女というものに、天然にそなわり附与されている生活力を見るにつけ、現在の貧弱な自分の位置に就いて、富岡は心細いものをひそかに感じていた**〉（二十）。〈**日本へ戻ってみて、初めて微妙な女心を見たような気がしたが、また、自分の変化した心の転移にも、富岡はひそかに幻滅を感じないではいられなかった。**〉（二十一）

敗北した男の打つ手はどこにも存在し得ず、何の結論も出て来ない以上、ゆき子の存在を「自分の道連れになって」もらう他はなかった。負けた犬の恋愛感情は哀れみでも孤独でもなく、ただ「道連れになって」もらいたい一心であった。ここで明らかに意識し出されるものは男のファンタジーと女のそれとの大きな相違点が存在していた。敗戦で負けた共通的な孤独感というよりも、富岡のゆき子を見る視線が男と女の性差――単純な女の生活のファンタジーのそれに移り変わっていくのであった。負けた犬の恋愛感情は哀れみでも孤独でもなく、ただ「道連れになって」もらいたい一心であった。そうした安易な女心に不服を感じた富岡はお互いの狡さに気づき始め、〈自分のこの女に、上手にあしらわれているような気がしている。

臺灣大學學術期刊資料庫

ゆとりのある女の心の状態が、富岡には厭な気持ちだった.別れ時が来ていると思った。(略) 富岡は、自分の淋しさを噛む気持ちであった。何一つ、押し付けることなく、この女に自然な死の道づれになってもらいたい気持ちだった。(略) **富岡は、何も考えてはいないような、単純な女の生活のファンタジーを羨みながらも、ひそかに、その女の、平易な心の流れに不服なものを感じるのだった。**〉(二十二)

### 三、伊香保——内部空間で限定される恋愛の対論理

ゆき子の方も昔の情熱が消えていくのを焦っていたのと違って、ジョオの情婦になってから大きく変貌する。〈日本へ戻ってからの自分の勇気を味気なく考えて、ジョオのことを、「あの人も淋しいのよ。あなたが、ニウを可愛がってた気持ちと同じよ……〉と富岡を口説き、〈現実を見抜いた女のずぶとさ〉(二十)を示しているのである。その気位は男性的な威圧的な態度で女性の肉体を求めていたのと同様に、自分とジョオとの肉体的関係を位置付けるのである。〈やりばのない、明日をも判らぬ、一時しのぎの傾向が、自分の本当の生活なのだと、ゆき子は大胆になって、富岡の顔をじっとみつめた。埃臭い男の体臭が、かえって哀れに思えて、ゆき子は、環境で変わっていく人間の生活の流れを不思議なものと悟る。少しずつそうした眼力が肥えていく事も淋しいとも思わずにゆき子は高見にたって、富岡を見くだしている気位を示していた〉。〈自分の周りの男は、どうして、こんなに落ちぶれて卑しくなってしまっているのかと〉(二十一) ゆき子は思った。この時点においてはゆき子の男を眺める眼差しは『晩菊』の老妓のんのそれに髣髴させる面影が想起されるものである。〈富岡にとっては、酒は麻薬のようになっているのかもしれない。どんないい仕事に就いたところで、こうして、毎日酒を飲むとなれば、少々の収入では追いつく筈もない。ゆき子は、富岡を哀れがるよりも、腹立たしいものがこみあげて来た〉(三十三)。このような富岡批判は殖民地ダラットの仲間、内地に引き上げてきてから同様に無職のまま落ちぶれた加野の視点によって、〈「あいつは運の

臺灣大學學術期刊資料庫

いい奴ですね。人の落ちぶれには理解を持って、そうした人間の運命をなっとく出来る顔でいながら、自分は住み心地のいい椅子にかけて、仲々動き出ようとしない男ですからね。」〉と（三十五）さらに加えられていく。ゆき子は、伊香保へ富岡と心中をしに行って果せなかった事を思い出していた。加野は何も知らないから、あんな事を云っているのだと、思っていても、心のどこかで加野の富岡批判が的を得ていると頷かずにはいられなかった。語りの特徴は「他者という合わせ鏡」という技法によって、お互いの視線が交錯するなかで、孤独、不安、愛欲行為を通して、より明確に性差的な他者像が把握されるのである。いよいよ戦後の哀れな感情、社会認識として二人が認め合った。

上述の通りに、男からみた女という他者観察、他者発見をしている富岡は更にその中で他者の中の自分（第二次の自己理解）を施しているが、それと引き換えに、ゆき子は女から見た男という他者観察、他者発見を見抜こうとしている。だが、果たしてゆき子は富岡のように、結果的に女から見た自分――自分の中の他者性に徐々に発見し出していけるものだろうか。冨岡の自己理解·他者理解が鋭く当を得ているが、ゆき子の恋愛依存は自己反省・自己変革の契機を開いていったのか。冨岡がゆき子にただ肉体的な満足を求めていたのだろうか。冨岡の果かなさが一体ゆき子が理解し得ていたのだろうか。冨岡がただゆき子に自分の孤独に道連れになってもらいたい気持ちだった。ゆき子の気持ちを理解していたにもかかわらず、ゆき子のそれはただ「ダラットの夢」――過去の記憶をもう一度取り戻したい女であった。一方は敗北した男の孤独であり、もう一方は過去を取り戻したい女の孤独であった。

富岡は仕事に失敗した。家を売り、両親を田舎に帰して、妻と二人の生活を始めたが、うつうつと楽しまず、ゆき子を呼んで二人で伊香保へ行った。富岡は、もうすべてがどうでもよいようなげやりの気持ちで、ゆき子を殺し自分も死ぬことを夢想した。そのことを口にだすと、ゆき子もそれならそれでよいという気がしてきた。

臺灣大學學術期刊資料庫

二人は伊香保で数日間を過ごした。富岡は宿泊料の足しにするため時計を売る。それはおせいという若い妻と一緒に住む清吉が買った。おせいは、清吉に飽き足らず、東京へ出てダンサーになりたいと思っていた。富岡とゆき子は、清吉の好意で、清吉の家の二階に移ったが、そこで富岡はおせいを誘惑した。富岡は、もう死ぬ気は失せていた。おせいによって生き返ったのである。このような心中未遂の事件、及びおせいという人妻への誘惑行為を見て、ゆき子はいよいよ究極としての冷めた恋愛感情を悟ってしまう。どう見ても甘ったれた哀れな男性としか映らなかったのに、なぜだめ男にそれほどの未練心を抱き続けるのだろうか。娼婦女とだめ男の二人が未だくっついている対論理が明らかなものである。

〈昨日まで伊香保にいた事が嘘のような気がした。眼の前に、まだ富岡が寝転んでいてくれるからいいようなものの、実際に別れてしまえば、この小舎での生活は、**一人では淋しいかも知れないのだ。**さっきまでは、昏々と一人で眠りたいと考えていたのだけれど、いまはまた、気持ちが変った。**お互いの素性を知りあったもの同士が、一つところに寄りあっている事は慰めだった。**〉（三十三）

富岡とおせいとの関係も〈あれは旅の行きずりの、富岡の我ままな一種の甘ったれだけであったのだろうか……〉。ゆき子は富岡の本心を見たような気がした。〈かえって、もてあそばれたようなかたちになって、家出をしたおせいに対して、ゆき子は何となく同情もしてみる〉（三十四）。語り手は加野という他者の視線を時々投げかけてゆき子批判をしている。男と女の冷めた現実とは実に冷酷な有様で表現される。言って見れば、加野も富岡のゆき子批判とは同質的なもので、一種の差別的な性差の視点でゆき子の逞しい生活力と変貌に違和感を感じずにはいられないものである。

〈**加野は加野で、久しぶりに日本でめぐりあってみたゆき子の現実の顔は、昔とはいくらも変ってはいなかったけれども、自分が富岡と血闘してまでこの女を欲しがっていたのだろうかと、**

臺灣大學學術期刊資料庫

**妙な気がしていたのはたしかである。**（略）**こんな女の何処に誘われて、あんな事になったのかとおかしかった。あの時の、出先の日本人の生活には、一種魔がさしていたのかもしれないのだ。みんな、虹のようなものに酔っぱらって暮らしていたような気がして来る。**〉（三十五）

ゆき子の場合は負けずにもっと人間的な（あるいは内地に戻ってからの内部規範の）視線で加野の変化に呆れた心持に捉えられる。相互に入れ替わりに「他者の目」を意識させ、その中心的志向は社会的空間によって限定される性差――男の強さに対して憎いほど思われた。〈ゆき子の方もまた、加野に逢って後悔してしまった。行かなければよかった気がした。あの時のままの加野さんと考えておく方が、よかったように思える〉。〈その場かぎりの感情で、物事を切り裁いて行く男の強さが、ゆき子に保いまでは憎々しい程の魅力になってもいる〉（三十五）。男の無力さを見抜いてしまっているゆき子はますます虚無的な心情に陥っていく。伊香保で情死さえできなかった富岡の情けない堕落ぶりと合わせて考えると、「場所」で限定され、空間的意味で意味でけられる男の生き方（恋愛も含めて）が悟られるのであった。だとすれば、無力な女の恋心はどうやって居場所を見つけ出していくべきだろうか。それは浮気心の男の一時的な「あの時」の情熱、という時間的意味のものを必死に掴み取ることが肝心なことである。

〈**何故一緒にあの場で死んでしまわなかったのだろう。……いまでは死神がとっついているような気もして来る。**（略）**あの時を外ずしてしまった事が、ゆき子には残念でもあった。初めに逢った時が本当のお互いだと**いう仏印の歌の文句のように、伊香保の宿で、富岡が、じいっと思いをこらしていたあの気持ちに、応えられなかった心の感じかたを、ゆき子はいまになって口惜しくなった。その癖、**ゆき子は、世の中や、男に対して、信用してしまう自信をなくしてしまっているのだ。二人が、情死をしたところで、うまく、気合のあった死に方はできなかったに違い**

臺灣大學學術期刊資料庫

**ない。死のまぎわまで、二人は別々の事を腹のなかでは考えているに相違ないのだ。**ゆき子には、それが厭だったのだ。〉（三十六）

ゆき子と富岡の共通の話題は、あの美しいダラットでの二人の愛の思い出である。ゆき子にとって、ダラットの思い出は今でも現実のものである。貧寒として佗しい戦後の生活の中で、二度とやってこない素晴らしいダラットの生活を思うにつけ、ゆき子は富岡がたまらなく恋しくなる。しかし、厳密な意味で二人がダラットで成就された愛の思い出は果たしてそれほど甘美なものだろうか。過ぎ去ったものはすべて美しく思い出されるの世の常というものだろうか。富岡は出会った最初からゆき子に惚れ込んで契りを結んだのだろうか。ゆき子にとって現実のものであるダラットの思い出は、富岡にとっては、戦時下の外地における限定された環境での過去のものであった。富岡の心に焼きついているのは、ダラットの大森林であり、ゆき子ではない。富岡の場合は「場所の悲哀」であり、求心的に日本社会、及び生活と仕事を求めていた。ゆき子の場合はむしろ「恋愛の悲哀」であり、愛に渇いて、男に絶えず激しい情熱を求めていた。愛に渇いている女はただ溺れたいだけの欲求によるものだろうか。社会から葬られた男女（たとえそれぞれカテゴリーの内部意味が違っていても）がただ肉体によって溺れたいわけだろうか。社会復帰しようとして挫折した男の幻の愛と、愛に渇いて、ただ愛されたい娼婦女の幻の恋愛であった。二つの異なる幻想を持ちながら、お互いの無力さを鋭く見抜いているにも関わらず、ただ甘さだけに溺れているのである。

## 四、銃後の女の恋愛論理――場所への回帰

ゆき子と富岡は、一週間ほどして東京へ帰ったが、その富岡を追っておせいが家出し、富岡はおせいと愛人関係になった。本質的に男と女の溺れ方が違うことに見届いてしまったゆき子は富岡の子を妊娠していたが、富岡とおせいの関係を知って思い悩み、思い切っ

臺灣大學學術期刊資料庫

て、近所の小さい婦人科医を尋ね、伊庭から入院費用を出させて子供をおろしてしまった。〈お互いに逢っている時だけの、だましあう二人の供述心理は、お互いにその深い原因にはふれたくない、芯はえぐりたくない、甘さだけに溺れているともいえる。ゆき子は、富岡の心の中を洞察していた。日がたつにつれ、ゆき子は富岡へ対して憎しみが濃くなり、あのような薄情な男の子供を産んでなるものかと云った、憎みっぽい気持ちになった〉（四十）。おせいは、おせいを追って上京した清吉に殺された。富岡は、おせいが死んだあともおせいのからだが忘れられないが、富岡はおせいによって再生を図ったにも関わらず、おせいが殺され、実質的に「道連れ」になってまらった以上、富岡は既に救いようのない自己嫌悪の気持ちになったのである。

退院したゆき子は、伊庭のやっている新興宗教の事務を手伝いながら、いつしか伊庭の妾のような形で生活していた。〈心中するつもりでいても、女の死ぬのを見て自分だけゆっくりその場をのがれて行く〉（四十三）富岡のずるさ・贋物的な根性をゆき子は猛烈に叩いたが、思い出にすがりつく索漠した男と女の愛欲関係に富岡がもうこれ以上我慢する余裕すら感じ取れなかった。その代り、富岡の心境はどうであろう。〈この女は、何時まで昔の思い出を、金貸しのように責めたてるのだろう……。昔の二人思い出の為に、いまだに、その思い出のむかしを、金貸しのようにとりたてようとしている。ゆき子の泣き声を聞いていると、急に富岡はむかむかして来た〉（四十三）。過去の場所で「一時」の思い出の恋に執念深くしがみついているゆき子に、ただむかむかするだけであった。〈富岡は、ダラットだとか、中国人の別荘だとかは、いまではどうでもよくなっていた。覚えているならば、その後は貴方が語ってくれと云わぬばかりのゆき子の甘さが、富岡には不快でもあった。そんな昔の夢はどうでもいいのだ。そんな夢にすがってなんかいられるものか……〉（四十四）と、「むし返しは沢山である」とさえ思った。

富岡は清吉のために弁護士を頼んだ。せめて、そうした尽し方を

臺灣大學學術期刊資料庫

してやるより、おせいへの供養はないのだ。ゆき子から、めんめんと、もう一度、二人は一緒になって立ちなおりたいと云って来たが、富岡はゆき子に対しては、もう赤の他人よりもひどい無関心さしかない。富岡の妻は浦和で富岡の両親と住んでおり、富岡に看とられることもなく、その後間もなくみじめな暮らしの中でみるかげもなく衰え、死んだ。〈富岡は、おせいの亡くなった時のような、名残り惜しさは少しも感じなかった。終戦以来、邦子を妻らしくあつかってやらなかった自責で、棺を求める事すら出来なくなっている、自分達の落ちぶれを厭なものに思った〉。富岡には妻の葬式を出す金もなく、金を都合してもらうためにゆき子を訪ねた。借金のために再びゆき子を訪れる場面には、この男は、金を借りに来たのだという事がゆき子にはすぐ判った。ゆき子は〈とうとう富岡が、落ちぶれてやって来たと思うと、胸の中が痛くなるほど、爽快な気がした〉。（五十）それと共に〈ゆき子は、分かれがたい気がした。邦子が亡くなってみれば、もう、誰にも遠慮なく、富岡とも一緒になれるような気がした〉。ゆき子は伊庭の金庫から大金を持ち出し、伊豆長岡の宿から富岡を呼び出した。富岡は、真面目な仕事を始めたいのでゆき子と縁を切りたいという。そんな富岡にゆき子は、ただ女を梯子にするだけだと、厳しい批判を浴びせながらも、なぜだか一方において、ゆき子はむしろ富岡の荒々しい力に引かされる恋愛感情が蘇ってきて、結果的に「女の最後の足掻き」として最も無性に富岡の「安らかに求められる愛情」に再び拘るようになった。

> 〈**富岡の貧しさが、哀れでもあったが、生活力のなくなっている男へ対しての魅力は薄れかけて来た気がした。**あの時、自分の背中の金庫から、あり金をさらって、富岡と逃げたい気持ちだったのだが、いまは妙に落ち着き、ゆき子は、まだ、二三時間はものを考える時間があると思った。（略）電気蒲団で腰があたたまって来ると、**ゆき子は、富岡の荒々しいあの時の力を、微笑して思い出していた。何時までも心の名残になるような、あの時が、肉体の一点につよく残っているそのことを考えると、富**

臺灣大學學術期刊資料庫

**岡に対して平静にはなれなかった。富岡のすべてに引かされる愛情が、自分の血液を創るための女の最後のあがきのような気もして来て、富岡にだけは、その愛情が安らかに求められる思いがした。**昇騰する心の波はまた、背後の金庫へ向って行く。〉（五十一）

この場面におけるゆき子の心機一転――結びの屋久島の死への転落の伏線となる描写となるが、魅力のなくなった富岡への恋愛感情が結局「心の名残り」の「肉体の一点」に集約されていくものである。『晩菊』の老妓きんの田部の若い自分の写真を火にくべた、という荒涼とした恋の終極と違った受け止め方をしているところは興味深いものである。ゆき子はとうとう辿り着いた恋愛の廃墟に拒絶反応を起こして、再び場所の外部世界――ダラットというユートピアへ幻の郷愁を仕向けていく姿勢を取り直したのである。

富岡は、友人の世話で屋久島の営林局へ赴任することになっており、この際ゆき子との縁を清算しようとしたが、ゆき子は、どうしても連れていってくれと同行をせまる。ここまで何の躊躇もなしに逞しくしがみついてくる女の足取りと生き様を見せ付けられ、〈富岡は、ゆき子との、**こうした長い交渉を宿命のようにも思うのだった。おせいも、邦子も死んだ。ただ、この女だけが、生き残っている。それも、逞しいファイトを持って生きている**のだと思うと、今度は、自分の方が、この女に追い詰められそうな気がした〉（五十三）。ゆき子も生きる希望も気力がなくなった富岡との腐れ縁をひたすら因縁のように嘆きを漏らすのであった。再び宿命のように感じられる両者の生の無意味さを確認し合うようになる。自己実現の居場所を失った男と、恋愛の居場所を失った女が今更一緒に死んでも死に切れない思いがするばかりであった。〈「伊香保で、何故、私達は気持ちよく死ねなかったンでしょう？」〉と問い掛けると、冨岡の方から〈「**お互いに、死ぬ必要はなくなったね。月日が、そんな風にうまく、取り計ってくれたンだよ。**」（五十三）と嘆きを交わすのであった。

臺灣大學學術期刊資料庫

〈「いや、もう、怒るも怒らないもない。**終戦後、みんな、こんな気持になってしまったンだな……。自分を基にして判断する力を失ってしまったンだよ。目的は、自分がつくるものじゃなくて、周囲がつくってくれるようになったンだ……。**〉（五十四）。

すべての悲哀は敗戦後の共通した気持に帰するしかない、とあやふやな結論と判断を下すようになる。だが、語りにおいては明らかに富岡の方がより一層強く時代の悲哀として意識され、場所を見失った悲しみの響き方をしていた。

二人は屋久島へ向けて旅立つが、すでに胸の病がゆき子を蝕んでいた。ゆき子は鹿児島で発熱、無理して乗船し、やっとの思いで屋久島にたどり着いた。屋久島は毎日雨が降り続いた。富岡の無精神状態のニヒリズムが深まっていく一方であった。〈**富岡は、この無精神状態のなかに、ゆき子と古いきずなを続けるのはたまらない気持だった。そのくせ、その古いきずなは、切れようとして切れもしないで、富岡の生活の中にかびのように養い込んでしまっていた**〉（五十七）。屋久島へ旅立つ前からゆき子の存在をただ「カビ」のようなもので、それは富岡と交渉を持って、死なせてしまった女達――安南人の女中ニウ、妻の邦子、ゆき子、おせいのいずれにも当て嵌められ、一致して客体化された存在となる。それは戦争に加わることなく、銃後の女の論理となるものであった。戦時中は自由な孤独を許されなかった富岡にとってはその精神的な渇きをすべてのお女に求めたのである。これこそ男の論理で位置づけられる二人の恋愛の正体であった。

ある大雨の日、富岡が山へ入っている間に、ゆき子は喀血し息を引き取った。息を引き取る前、ゆき子の頭をよぎったのは、富岡と一緒に過ごしたダラットの美しい景色である。〈ノアや、ロトの審判が、雨の音のなかに、轟轟と押し寄せて来るようで、ゆき子は、その響きの洞穴の向こうに、**誰にも愛されなかった一人の女のむなしさが、こだまになって戻って来る、淋しい姿を見た。**失格した自分

臺灣大學學術期刊資料庫

は、もうここでは何一つ取り戻しようがない。あの頃の自分は、どうしてしまったのだろう……〉(六十五)、と悔恨の心情を吐露する。富岡はもの言わぬゆき子に、〈案外、不憫でいとしくもあるのだった〉(六十六)。しかし、何か一つのことが終わったような心の軽くなるのを覚えた。一か月後、富岡は休暇をとり鹿児島にいた。富岡はこの一か月、すっかり酒に溺れ、別人のように顔が変っていた。〈人生はそれぞれに、他人の容喙を許さない、様々なアスペクトを持っているものだと、富岡は遠い島で考えていた〉(六十七)。ゆき子の死そのものがおせいの死、邦子の死のそれに同一視され、冷徹した眼差しで向けられるのである。すべての生はわが生と同様に「**神は無数に種子を蒔いた。収穫は、ただ、「おのずから」なる力にすがって育っているだけだ**」という言葉で『浮雲』は終わっている。〈**富岡は、まるで、浮雲のような、己れの姿を考えていた。それは、何時、何処かで、消えるともなく消えてゆく、浮雲である**。〉(六十七)

救いようのない女を描き、どこかに救いがある筈だともがきながら、益々暗い運命に落込み、果ては浮雲のように佗しく死ぬ。誰にも愛されなかった女の喘ぎはどこに「おのずからなる力」が足りなかったのか、更に深い言及がされていない。だが、結びの箇所において嘆きをこめて漏らした富岡の感慨には、性差の観点から見れば、明らかに浮雲的存在として自他認識を獲得した富岡(芙美子)の視点から、ゆき子の無自覚性、並びに女の他者性にどことなく厳しい批判を施すものであった。

## 五、身体と表現の二元分裂——芙美子の他者性

「浮雲」的存在という自他認識をし得た富岡の孤独感は明らかに大いに社会から外れた気後れが大きく作用していた。敗戦後の日本社会は〈浦島太郎の氾濫する時代〉でもあった。〈戦争は僕たちにひどい夢を見せてくれた〉(二十七)と、哀れがる富岡にとっては敗戦が如何に男たちの戦争だったかを語る描写が随所に散在している。確かに黴のような生活しか許容されない富岡の社会認識がどこかで

臺灣大學學術期刊資料庫

自分の存在感を一般社会の人たちへ重ね合わせようとした。〈敗れたものの哀れさは美しい〉。〈孤独な国の、一人一人は釘付けになっているものだと考える。如何なる戦争も、やぶれてこそ、愛らしく哀れでもあると思えた〉(二十二)。「戦争」さえなければ海外への派遣もゆき子と出会うこともなかった。これは彼なりの空虚さの解消方法であった。〈富岡にしたところで、こうしたごみごみした敗戦下の日本で、あくせく息を切らして暮らす気はしないのである。野生の呼び声のようなものが、始終胸のなかに去来していた。イエスの故郷が本来はナザレであるように、**富岡は、自分の魂の故郷があの大森林なのだ**と、時々恋のように郷愁に誘われる時がある〉(十四)。戦時中は自分の魂の故郷はダラットであったように、情婦というカテゴリーから逃れようとするゆき子にとってはダラットの夢は制度外の息抜きの場所でもあった。両者の噛み締めた孤独感と悲哀ははみ出された者同士で一致していたが、ゆき子の場合は恋愛が成就される悲願が強く響かせていたのである。

だから、この作品の表現効果から恋愛幻想という性差の視点で改めて評価すれば、敗戦小説というよりも、二つの異なる幻想――男の自己実現の幻想と、女の制度脱出の幻想――の物語として見るべきだと思われる。社会指向性を帯びた男の自己実現の幻想はつまり、社会復帰、仕事と職業そのものであった。恋愛指向性を帯びた女の制度脱出の幻想は家庭の妻役からはみ出しても肉体的に放逸する女は、結局、一対一の古い対幻想の恋愛感情へ回帰していくのであった。家庭外の女の自立と依存の両義性をずばり指摘すれば、それは男の女性依存(肉体的な意味)と女性批判(恋愛)と、女の男性依存(恋愛)と男性批判(生活力)、という両義的な図式のものであった。冨岡の視点で女という他者像、社会像がいよいよ明晰になって、形づかれていくが、しかし、ゆき子の恋愛依存は自己変革・「自分の中の他者」の契機が開かれていったのか。ゆき子の「自己変革」が果たして達成されていったのだろうか。社会制度からの脱出しようと踏ん張ってきたゆき子は、結局安らかな愛情の求められる」相手

臺灣大學學術期刊資料庫

の男の許から引き離すことをしなかった。異類女の身体（生活力）と表現（恋愛感情）の二元分裂は身体の面において、性的奔放を経験する娼婦的行為によってその生活力の逞しさを果敢に現した。一方、表現としての恋愛感情は依然として、運命の人という男性依存の恋愛幻想を拭ききれなかったのであった。冨岡の恋愛感情はただ果かない習慣として考えているが、ゆき子はむしろダラットの夢を取り戻そうとして懸命に縋り付いていた。しかし、心が変ってしまえば、仏印の記憶がもはや取り戻す術もなかった。これぐらいの認識が冨岡が哀れで無力でありながら獲得して、ただ孤独の道連れとしてゆき子を扱っていた。仏印ではニウとゆき子の二人の女性と肉体関係の上で交渉を持つことによって、その孤独と不安を紛らそうとしたものの、内地へ戻ってきてからは、生活の上で敗北した男がなおかつその喪失感をゆき子、妻の邦子、おせいと軽々と女の肉体の温もりを頼りにして、その寂しさを追い払おうとした。ニウに関した描写は僅かであるから除外されてもいいが、その他の女性のいずれも彼にとっては精神の上まで縋り付いて、依存すべき強大な存在であった。だめ男に限って女の肉体存在が捨てがたいものだろうか。男も女も恋はするが、男の場合は絶えず恋の経験を味わいつつ、果たしてどこまで愛し切れるものだろうか。その代わり、女はひたすら愛されたい念願で男に縋り付いていても、依存する女は挙句の果てに男の孤独の道連れという役割しか果たし切れず、葬られていくのであった。

問題は冨岡はそうした男と女の恋愛感情を冷ややかな眼で見抜いてしまっても、女のゆき子の場合はどこまでも自己欺瞞の気持ちで過ぎ去った過去の恋愛の幻想を夢見ているだけである。ゆき子は最後まで自己の内面の他者――新しい自己発見ができずに、ひたすら愛されたい女（形はそうであっても、その実は彼女こそ男の命綱であったのに気が付かずに）の役割を尽くして、生を終えてしまったのではないだろうか。そういう意味から考えると、この作品の表現効果として、語り手がより冨岡の視点を通してゆき子（過去の芙

臺灣大學學術期刊資料庫

美子の男性体験が語るもの）の恋愛感情に潜んでいる無自覚性へ批判的な眼差しを注いでいるようにも思われる。平林たい子氏はゆき子の悲恋感情よりも、冨岡の造型について、〈戦後には退廃した精神を、敗戦を背景とした小説が無数に生まれたが、敗戦で挫折した人間像の形成には、なぜか誰もあまり成功しなかった。「浮雲」の富岡は、その文学史の空白を埋め得る一つの典型である〉[12]、と賞賛を称えている。ゆき子という娼婦女の恋愛観には男性に自らを添わせることによってしか自己の主体を確認し得ない女性の他者性を示しているところには敗戦後の共通した孤独の感情というよりも、芙美子自身の二十年の心の遍歴であった。つまり、冨岡の眼差しが晩年の芙美子（語り手）のそれと重ね合わせている。「浮雲」のゆき子の哀しみは〈飢えよりも愛の渇きの方が大きく、それは観念的なものである筈だが、絶望的な暗さは拭いがたいのである〉[13]。『浮雲』は、ある意味では、晩年の芙美子の心をある危機――〈戦争をなかにおいた二十年の心の遍歴ののちに、林さんの心の前には、ひとつの大きな虚無〉[14]――から救った作品だと言っていい。

だが、更に厳密な意味で考えれば、男性の冨岡こそ諦念した晩年の芙美子の姿に髣髴させるものではないかと、筆者には思われる。戦争から疎外されているからこそ生命を永らえることへの「申し訳なさ」が、男性によって作られた体制を容認することへの反省は、ここには勿論ない。言い換えれば男性に自らを添わせることによってしか自己の主体が確認し得ない女性の他者性を富岡の視線によってあからさまに肯定されているといえるのではないだろうか。しかし、冨岡の人物像にはもし晩年の芙美子男性認識というよりも、文学史的言説の視点から見て、中川成美氏はダラットのユートピア（魂の故郷、共通の郷愁）から窺える芙美子の海外志向を、芙美子の戦

12　平林たい子「解説」『日本の文学 47』、中央公論社
13　熊坂敦子「浮雲〈林芙美子〉」『国文学――解釈と教材の研究』昭和四十三年四月号、学灯社
14　古谷綱武「解説」『浮雲』、新潮文庫、昭和 28.4.発行、昭和 43.6 改版、平成 12.5 第 75 刷

臺灣大學學術期刊資料庫

争関与の姿勢として、日本のアジア侵略に言説の側から援護した自身の苦い経験と重ねあわされていると指摘している[15]。

〈芙美子はベトナムのダラットを徹底して「ユートピア」として描き、その楽園から放擲された在罪人としてこの主人公たちをより苛酷な運命に向かわせる。ゆき子はベトナムを「地球の上には、かうした夢のやうな国もあるものだ」（四節）と感嘆して、やがて「日本の遠さを、心のうちではよその民族を見るやうな思ひ」（三十六節）にとらわれる。冨岡もまた「自分の魂の故郷はあの大森林なのだと、時々恋のやうに郷愁に誘はれる」（十四節）ことがある。二人とも戦争の一切の罪行を忘れ、この共通の「郷愁」のみを手掛かりに抜け道のない関係を持続させていく。

**ダラットに表象させた芙美子の「南方」は、戦時下のジャワ島やスマトラ島で彼女自身が獲得した「身体性」（歴史的時間軸に拘束されない生命性の発見）と大きく関与する。そうした「身体性」を危うくする戦争に、芙美子は結果として参加して、言説空間に影響力を持った。こうした矛盾への解決として彼女が果たしたことは、「異郷」としての東南アジアを自らの身体に取り戻し、戦後空間を「異境」（『牛肉』あとがき、改造社、昭 24）として他者化してみることだった。**そしてこの**アイロニーに満**

---

15 林芙美子と戦争とのかかわりを考えるのに、1937（昭 12）の日中戦争勃発を契機に彼女が急速に戦争に取り込まれていった。「銃後」に取り残されるのではなく、中国で自己実現を賭けようとするところに芙美子の視線の位置が見てとれる。その東南アジア体験は以下の通りのものである。以下の引用は（中川成美「林芙美子――女は戦争を戦うか」『南方徴用作家――戦争と文学（神谷忠孝・木村一信編集）』、世界思想社、1996.3）を参照した。

| | |
|---|---|
| 1930.8～1931 | 四回ほど中国東北部などを旅行している。 |
| 1937.12 | 毎日新聞特派員として南京欠落報道のための上海、南京行きである。 |
| 1938.9 | 芙美子は従軍作家陸軍部隊として久米正雄らと十三名と上海に着く。以後、『朝日新聞』にその行動を華やかに報道した。帰国後も各地を巡り戦果報告講演を精力的にこなした。 |
| 1939.1 | 『北岸部隊』を出し、戦争を表現できる。 |
| 1940 | 「満州」を舞台とする「十年間」を『婦人公論』に連載する。 |
| 1942.10 | 陸軍報道部の臨時の徴用にシンガポール、マレー半島、ジャワ島に赴く。 |
| 1943.1 | インドネシアに渡り、スラバヤを拠点にジャワ島を回り、スラバヤ郊外のトラワス村に寄宿する。 |

臺灣大學學術期刊資料庫

**ちた奪還**を、ダラットの美しいジャングルに戦争を集約した小説『浮雲』に凝縮して提示した。〉[16]

以上の指摘には作者芙美子の東南アジア体験による異空間の獲得＝戦後空間を他者化するところが注目される見解であるが、筆者はここで締め括りとして、無感動のまま滅びていく敗北者として描かれている富岡とゆき子の共通した郷愁を、「場所」の経験という意味から把握し、更に他者化された「ダラットというユートピア」の異空間（outsideness）体験の意味を吟味してみたい。二つの異なる幻想はその行き着く魂の故郷――ユウトピアとしてのダラットは過度に美化されているため、この異郷体験は両者は共に内部空間の社会制度から脱出し切れなかったことを意味し、限定する。しかし、そこには同時に、作家林芙美子晩年の韜晦されたニヒリズムが潜んでいたとも思われる。〈誰の眼にも見逃されてゐる、空間を流れてゐる、人間の運命を書きたかった〉芙美子の考えた〈一つのモラル〉は、何であったのだろうか。

戦時中及び日本の敗戦後、日本の国民全体に秘めていた閉鎖的で、苦悶の虚無的心情を、「言葉」という「表現」(『浮雲』というテキストの制作）と、「身体」（ゆき子の郷愁となる対幻想の恋愛）の分裂性をどれほど芙美子自身が意識していたのだろうか。ユウトピアとしてのダラットが美化されればされるほど強化されてくるものは男の富岡の社会指向性というものである。娼婦的生涯を送ってきて、戦後の混乱な世相を生き抜いたゆき子の内面感情の対幻想はやはり一種の無自覚、独り善がりの思想が流れていた。男と女の性差を意識しながらお互いに他者に視線を投げかける富岡とゆき子は自立と依存、共存と背反の両義性を具現した人物とも言える。ただ、明らかに富岡の方が冷めた自己理解と他者理解を獲得していると思われる。その代わり、困難な時代を生き抜いた、生活力抜群のゆき子は到底「恋愛」という依存の心理が拭き切れなかったものである。こ

[16] 中川成美「林芙美子――女は戦争を戦うか」『南方徴用作家――戦争と文学（神谷忠孝・木村一信編集)』、世界思想社、1996.3

臺灣大學學術期刊資料庫

のような恋愛幻想の無自覚性はつまり〈神は近くにありながら、その神を手さぐりでいる、私自身の生きのもどかしさを、この作品に描きたかったのだ〉と深い感慨を漏らした芙美子の「生きのもどかしさ」だったのではないだろうか。芙美子はその晩年に吐露したものは内部空間と外部空間を進出する異類女の捨て切れない性差――女の恋愛幻想の哀愁を徹底して表現して見せたである。

**参考文獻**

【作品の原文引用は新潮社『林芙美子浮雲』(1953.4 発行. 1968.6 改版. 2000.5 第 75 刷) によるもので、現代仮名遣いに改められたものである。】

大久保典夫 (1975)『昭和文学の宿命』冬樹社

尾形明子 (1980)『女人芸術の世界』ドメス出版

平林たい子 (1969)『林芙美子』新潮社

森英一 (1992)『林芙美子の形成―その生と表現』有精堂出版

山口昌男 (1975)『文化と両義性』岩波書店、(2000) 岩波現代文庫

ロトマン (1970)『芸術テクストの構造』ユーリー M.ロトマン著；磯谷孝訳

―― (1998)『文学理論と構造主義―テキストへの記号論的アプローチ』勁草書房

板垣直子 (1972.3)「近代女流作家の肖像　林芙美子―作風の向上と発展」「解釈と鑑賞」

今川英子 (1993.3)「林芙美子『浮雲』試論」「昭和大学院短期大学紀要」29 巻　昭和学院短期大学

川口明美(1987.10)「『浮雲』(林芙美子)」「国文学解釈と鑑賞」52-10、至文堂

河野基樹 (1991.3)「林芙美子『浮雲』論―共生の模索が意味するもの」「日本文学論究」50

熊坂敦子 (1968.4)「浮雲〈林芙美子〉」「国文学」13-5　学灯社

臺灣大學學術期刊資料庫

中川成美（1996.3）「林芙美子——女は戦争を戦うか」『南方徴用作家——戦争と文学（神谷忠孝・木村一信編集）』　世界思想社

中村光夫（1969.1）「林芙美子論」『現代日本文学大系 69』初版　筑摩書房（初出；1954.2）

福田珠己（1991.8）「場所の経験：林芙美子『放浪記』を中心として」、「人文地理」43-4　人文地理学会

古谷綱武（1953.4）「解説」『浮雲』　新潮文庫；1968.6 改版. 2000.5 第 75 刷

前田愛（1992.8）「空間のテクスト　テクストの空間」『都市空間のなかの文学』　ちくま学芸文庫；初出：（1982.7）同題「現代思想」

水田宗子（1977.6）「夢の壁を超えて」「現代詩手帖」40-6

渡邊澄子（1998.2）「林芙美子と平林たい子」「国文学解釈と鑑賞　特集林芙美子の世界」63 号-2　至文堂

臺灣大學學術期刊資料庫

臺灣大學學術期刊資料庫